

診療所実習を通して学んだこと

あかりこどもクリニック 3年 ON

私は、7月18日にあかりこどもクリニックで1日診療所実習をさせていただいた。初めて小児科で実習を行わせていただき、大人を中心とする診療所とは違う工夫を発見することができた。

午前中は看護師さんの仕事や事務作業を見学させていただいた。看護師さんが事務作業を行ったり先生の間診の前にも軽く問診をして先にある程度の情報を得てカルテに入力したりスタッフ間で協力してフォローし合っているのが印象的だった。あかりこどもクリニックでは主に中学生までのこどもの診療を行っているが、こどもだけでなく親御さんの診療もしているようだ。小さいお子さんを持つご家庭では子どもの生活に密着しているためどうしても同じ感染症にかかってしまうことが多いと思うので患者さんにとってありがたいシステムであると感じた。また、予防接種の際に貼るブラッドバンには手書きの絵が描かれていた。子どもたちが好きそうなキャラクターがカラフルに丁寧に描かれていて温かい気持ちになった。このような子供のためのことを思うその気遣いが、この診療所に診てもらいたい、この診療所にはかかりやすいという患者さんの気持ちにつながるのだと考えた。

また、お昼にクリニックの大切にしている心構えや施設の工夫を教えていただいた。心構えの中でも私はチーム医療内の心理的安全性の確保の考えに感銘を受けた。例えば、スタッフにも家庭を大事にして欲しいため、休みを取りやすい環境づくりをしているようだ。クリニック内のスタッフの雰囲気は本当に明るく相手が言いやすい環境が整っていると感じた。そしてこの環境があれば医療においてミスがあったとしても多くの目で見てそれを指摘することができ、良い医療を行うことができると考えた。スタッフの充実あってこそ、余裕が生まれ患者に良い医療が提供できるという考えに共感し、チーム医療を行うための新たな視点を学ぶことができた。さらにクリニックを建てる時にこだわったポイントをいくつか教えていただいた。こどもには楽しく親御さんには守られている感じを感じて欲しいという願いのもと、様々な工夫がされていた。小児は感染症が疑われる症状でクリニックにかかることが多いため、予防接種で来院した患者さんは正面入り口ではなく予防接種専用の入口から入り患者さん同士の不必要な接触を避ける構造となっていた。あかりこどもクリニックは患者さんの数ではなく質を重要視しているため駐車場の数を減らしてでも幅を広くとっていた。こどもが他の人の車を傷つけないように、ベビーカーを置きやすいようにと考えられた設計をされていた。院内では、ドアや部屋では大人が目線に文字を、子どもの目線にそれに関わる絵を貼ったり、プレイルームでは、親御さんは他のお子さんと喧嘩にならないかや危険がないように見守るなど意外と気を使うためそれをなくしたりしていた。細かなことではあるが患者さんに寄り添うということを学ぶことができた。

午後は、院長先生の診察を見学した。発熱、咳、鼻水、腹痛、嘔吐や下痢、予防接種で来院する患者さんが多かった。発熱と咳が主訴の患者さんが来院した。こういった症状の

患者さんには特に保育園や幼稚園で流行している感染症はないかを確認していた。保育園や幼稚園に通い出すと人と密に関わる機会が増え感染症にかかりやすくなるため診察において重要事項なのである。この患者の親御さんは周囲でRSウイルスが流行っているのを疑っており検査をしたいとのことだった。RSウイルスとは風邪などの症状を引き起こすウイルスであり一般的には軽い風邪だが、乳幼児は重篤化する恐れがあるものである。そこで先生は、患者さんの咳などの状態と保育園での流行を考慮して、重症化しそうでないことを判断しRSウイルスによる風邪であろうと診断していた。RSウイルスによる風邪は自然治癒することが多いため重症化しそうでない限り、鼻の穴に綿棒を入れる検査なので子どもも検査を不快に感じることも多いのでわざわざ検査をしなくても良いそうだ。しかし親御さんは心配そうだったので気持ち的にRSウイルスだとわかっていた方が安心するのならば検査を受けるのも良いと思うと話していた。このように患者さんや親御さんにメリットデメリットを伝えてその上で意見を尊重している姿が印象的だった。

卵アレルギーを持った患者さんの診察を見学させていただいた。食物経口負荷試験を行っていた。先生は卵白を食べたのか卵黄を食べたのか、どんな調理方法だったのか、どれくらい食べたか、どれくらい時間が経ってから症状がでたのか、どんな症状だったのかを細かく聞いていた。以前は、食物アレルギーはその食物を避けるようにしていたが最近は慣れさせることで食べることができるようにする方法をとるようになってきていると学んだ。やり方を間違えると危険な状態になりかねないので、どんな症状が出たら危ないから病院に来てと絵を描きながら説明しており、親御さんは安心していた。

先生はここにくる患者の9割は自然治癒するが残りの1割を見逃さないようにとおっしゃっており、診察時間が長なっても丁寧に細かく診察を行っていた。診察の後、必ず患者さん全員に「他に何かありますか？」と聞いていたことが非常に印象的だった。1日の実習でも親になるのが初めてであったりこどもと大人とでは違ったりするため親御さんは子どもについての心配が尽きないのだと感じた。そのため、その言葉で症状や育児の悩みなどを相談する親御さんが多く、この時間は必要不可欠であると感じた。小児科は、主にこどもを相手にするので言葉が通じなかったり人見知りをしたり、こども本人とだけ触診などを行うことは難しいので診察が大変であることを知った。医療において座学で学ぶ知識はもちろんであるが、医師という職業としてどうしたら患者さんと自分にとって良い医療ができるかを考える良い機会になった。相手の立場に立つということ、特に親御さんに寄り添うということを学ぶことができた。自分を含むチームのスタッフと患者さんを大切にしている気持ちを忘れず、この貴重な経験を活かして勉学に精進していきたい。

最後に、お忙しい中、今回の実習を受け入れてくださった北原先生をはじめとするあかりこどもクリニックの皆さん、患者さん及びその家族に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。